

野田宇太郎 文学散歩

第2卷

文一総合出版

著者略歴 明治42年(1909)10月、福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念、久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで、出版編集に携わる。その間、雑誌『文藝』、つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり、以後、著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他、全詩集『夜の蜩』、近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』、木下杢太郎研究『きしのあかしや』、近代詩史『詩人と詩集』、キリシタン史『少年使節』、紀行随筆『日本の旅路』、戦中記録『灰の季節』、戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年、第1回九州文学賞(詩)受賞、昭和50(1975)年度藝術選奨文部大臣賞受賞、昭和52(1977)年、第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩 2
東京文学散歩 下町篇 上

昭和53年2月10日 初版第1刷発行

著 者 野田宇太郎

発行者 佐藤 弘一

発行所 株式会社 文一総合出版 東京都千代田区神田神保町1-32
電話東京(291)8049 振替東京2-42149

©1978 0395-90102-7354
定価は、函・帯に表示してあります。

印刷・製本 奥村印刷

目次

下町について

七

築地

築地の歴史 明石町河岸 ポプラ並木と聖路加と 鉄砲

洲の福澤塾 橋 築地橋界限 荷風と築地 本願寺別

院と九條武子 小劇場の跡

銀座

銀座の碑 煉瓦・瓦斯燈・オムニバス・新聞・カフェー・文

士 銀座的人物 銀座詩集 忘れられた出版社 透

谷・藤村・数寄屋橋 滝山町の歌 歌舞伎座附近 汽笛

一声 夜の銀座

日本橋川のほとり

二五

京橋通りと『東京の三十年』 丸善の思い出 日本橋にて

泉鏡花の『日本橋』界限 一石橋 魚河岸 按針碑 江

戸橋と荒布橋 「朝なり」 小網町河岸 海運橋にて

『河明り』の街 新川と越前堀と

日本橋北部

三九

谷崎潤一郎のふるさと 谷崎活版所 人形町から親父橋ま

空

三

で

瓢箪新道と「パンの会」

本町通りの詩と詩人たち

*別刷写真はすべて著者の記録撮影で
本文と共に無断使用を禁じます。

東京文学散歩 下町篇上 おぼえがき

敗戦後の東京の復興は被占領時代はさすがに遅々としていたが、聯合軍の対日平和条約がようやく発効することになった昭和二十七年四月からは、その気運も徐々に動きはじめた。わたくしの東京の文学踏査は昭和二十五年十一月に起筆した『新東京文学散歩』によって始まっていたが、その後都市改造の活発化のきざしが見えはじめると、一層稠密な踏査記録の必要を痛感して先ず隅田川兩岸を上流から河口まで更めて歩き、続いて河口から自然に隅田川右岸の下町に移った。本巻はその下町の上巻で、築地、新橋、銀座、京橋、日本橋を収めているが、すべて昭和三十三年春から初秋にかけての記録である。その頃はもう銀座周辺の堀川が埋め立てられるなど、下町の生活を彩り支えた水景が過速度に姿を消しはじめていたから、文学史のためにも本来の東京の都市美を出来るだけ記録に残すことにした。従って特に水を命とした下町のあがままの姿は本巻以外には見ることが出来ない筈である。別刷写真資料も特殊なものを除き、すべて昭和三十三年の記録であることはいうまでもない。なおその後に極端な変化をした部分については註記を添えると共に、本文は徹底的に再検討してより完全な決定版とすることに努めた。

(著者)

東京文学散歩

下町篇 上

下町について

東京の市街で江戸以来の山の手に対する下町したまちという呼び方は、十七世紀後半の延宝、天和年間の戸田茂睡はらひすいの江戸名所記『紫の一本ひともと』にもすでに見られるので、江戸時代もかなり古くから使われていたことが知られる。隅田川が武蔵と下総の国境であった頃の江戸といえはその西岸だけであったが、市街地の東北部の丘の連なる方を山の手と呼んだのに対して、隅田川から海に接した低地部の、水路などの多い方を下町と呼んだ。日本橋、京橋、芝、神田、浅草、下谷などがその下町の主な部分であった。しかし江戸の地域が隅田川の東岸から今日の東京と千葉県境となっている江戸川（古利根川）のあたりまで広げられると、本所や深川なども江戸の下町として繁栄した。

このように初めは地形的区別にすぎなかった山の手と下町は、徳川幕府と共に江戸が栄えてくると、地形としてばかりでなく内容としても性格の相違がはっきりとあらわれる。山の手は大名をはじめとする武家屋敷や寺院などを中心とした地域になり、商家などは下町に集まるようになった。花川戸

助六とか幡随意長兵衛などの歌舞伎にあるような町人と武家との対立感情も、自然に山の手と下町とを区別する原因であった。この傾向は江戸の市街が次第に発展してゆくにつれて、いよいよ截然として行った。そして江戸が東京になり、風俗や言葉遣いにさえ山の手と下町は相違が目立つようになった。東京となって資本主義社会がかたちづくられると、それは有閑的の山の手に対して庶民的下町という階級差別的な注目すべき形にまでなっていた。明治初期の高官はもちろんのこと、官吏などには薩摩や長州出身者が多かった。それは江戸っ子にとっては田舎者だが、その田舎者がより多く山の手に住んで羽振りをきかせるようになる、それがまた江戸の幕府を倒した「敵」ともいうわけで、下町の反感も感情的になった。山の手の人々は下町の人々を「町人たち」と見下げて呼び、下町ではこれに対して田舎者の成り上がりという軽蔑と反感とをまじえた「のて」という呼び方もした。山の手「の手」である。しかし、この二つの生活対立も明治大正昭和と打ち続く東京の激しい変化には勝てず、やがて下町と山の手が混乱するような時代が来た。

東京の、ことに下町を激変させたのは、なんと云っても大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災である。その直後に始ったのが帝都復興の大事業であった。これによって東京の近代化が急速に進捗して、それまでの打ち続く市街の変化に悩まされ、生活の落着きを失いかけていた市民達も、これからは静かな生活が取戻せると思われた矢先、今度は日支事変から太平洋戦争であった。そして敗戦である。順調な都市発展の中断と、無残な戦災。もうこうなると休むことを知らぬ市街の変化は、東京の宿命的な常態だというより他はなくなった。

その戦災による東京の変動は終戦後十数年をかぞえる今日といえども依然として打ち続けている。

戦後の著しい復興振りを観た外国人は、日本を不死鳥フエニックスにもたとえるが、不死鳥などという他人事の表現に甘んじていてよい筈はない。いやそれどころか、戦後の変化はそれまでの東京の不死鳥的復興とはいささか違った性質を持っている。すくなくとも震災までの変化や復興には、どんなに激しい西洋化がともない、またどんなに思い切った都市改造が行われても、その中心に伝統を守る反省があった、人間生活を物心両面から幸福にせねばならぬという根本の良識が厳存していた。古い歴史的な場所や建物などが都市改造によってやむなく消滅すると、市民の愛著をそのままに、そこには必ず記念碑の類が造られたのもその一例であつたろう。しかし戦争という暴力の敗北に打ちひしがれた挙句の果ての、混乱と共に行われる改造には、残念ながらささやかな良識も認められない。今日我々の接している都市改造は、建設というよりむしろ伝統の破壊であり植民地化であつて、いたずらに消費街ばかりがはびこり、国民の生活実情とはあべこべな、ただアメリカ的便宜主義の巨大なビルばかりがよきによきと出現しつづつある。そこに醸し出される不均衡は銀座や日本橋辺りの表通りから一步離れた裏側の大通りをちよつと歩いただけでも判ることで、モダンな設計のビルと並んで、古びて軒を傾けたままのバラックがまるで何かの抵抗を示すように堂々とがんばつていたりする。これは植民地的変革にすぎないのだと誰しも気づくに違いない。——こう思う間にも時間は刻々と未来へ流れている。日本人はやはりどこかで良識を取戻そうとあせっている。巨大なビルは巨大なままに、定まるものは定まって、いつかは本当に日本人誰しもの幸福のための存在となるだろう。だからいたずらに悲

しもうとは思わないが、また一方に永い間の江戸から東京への人々の生活史のなかで、つねに心に潤いを与えて来た美しい東京の自然、ことに下町の堀や川などが都市改造という名の目先の利益のために、ただ無意味に埋め立てられて、その水影がなくなり、橋の名が掻き消されてゆく現状には、それが大切な都会生活の感情につながることにだけに、黙視してばかりはいられない。大震災後の帝都復興事業を思い出してみても、一つの橋をつくるにも東京に生活する人々の本当の心を尊重して民間に呼びかけ、例えば八重洲橋は詩人で科学者（医学者）だった木下杢太郎の設計を採用して建造された。その都市計画者の良識を今にしてなつかしく感ずるのである。

ところで、堀や川がなくなっているのは、下町がなくなつてゆくことに他ならない。堀や川が埋め立てられ、その跡がただ無味乾燥なごみごみと息苦しい街になつてゆくのは、人間の自然征服という世紀末的文明欲ではなからうかとさえ思う。文^{シレセイシ}明^ンはつねにその民族の文化に管理されバランスを保つてゆく時、人間の幸福に役立つが、文明と文化が不均衡になり、文明のみが先に進むと、たとえば現代の宇宙ロケットのように、月の征服が同時に地球戦争の基地化にもなりかねない不安に襲われ続けねばならぬ。人工衛星が次々とびはじめても、人間は宇宙世界の利用や進出で幸福にはなり得るものではあるまい。

自然と云つても、これは人間の外にあるものではなくて、つねにその内心にひそんでいる幸福の元素のようなものである。だから下町から水影がなくなり橋がなくなるのは、人々がその理由を納得しない限りは、一部の利権欲の権化によって人間の幸福が次々に奪われているのだと思われるのも当然

である。埋め立てられる理由は都市計画よりも堀や川が穢きたなくなつた場合が多い。しかし穢きたなくしたのは、人間がその堀や川への愛情を忘れた結果にほかならない。

山の手と下町には地理的な関係から情緒にも極端な相違があるのは当然で、下町の堀や橋に対して山の手には坂や森の自然がある。この橋と坂はまた東京の自然の息吹きのようなものだといえる。下町の母体であり、東京の母とも、心の象徴ともなつた隅田川が、今ではまるで汚水処理場同様に汚されてしまい、魚さえも、また都鳥の名で知られた鷗オウの類さえも姿が乏しくなつたのは、人間、お前達もやがては住めなくなるぞという天の警告とも受取れる。世界に誇る江戸藝術の錦絵などを生んだ下町が、このように惨めにされてよいわけではない。これはやはり自然の摂理なのか、日本人の美的觀念の喪失なのかと、問うまでもないことである。いわゆる良識の失墜がそこに歴然とみとめられる。敗戦以来、心の祖国を失つたままの狂乱のマスコミの中に定着しようとする彷徨さまよえる日本人だからでもあろうか。

「如何に方法は流転するとは云へ、かういふ変化の絶え間ない都会は世界中にも珍らしいであらう」とは、芥川龍之介が昭和二年に「本所両国」という文章に書いた切実な歎きであつた。震災後の変化が特に激しかった下町の本所を生れ故郷とする芥川であつたから、その歎きも深かつたのだろが、この東京の変化に対する悩みはあれから三十数年を経た今日といえども同じである。不死鳥などとおだてられても、東京に対する確信と落着きの無い騒がしさは、決して我々にとって有難いことではない。わたくしは時折このような東京に、薄気味の悪い哀れな舞踏病患者を思い出すことさえある。

あまりに激しい変化の連続に慣らされて、ついには身体のどこかを絶えず踊らせていないと東京らしくないともいうような、永遠に翼を休めることを忘れた不死鳥の歎きなのかも知れない。

わたくしがあえて文学という道しるべを頼りにして、江戸以来の考え方を尊重しながら、いわゆる下町を歩こうとするのは、東京の片隅にでもささやかな本当に平和な生活を営むことが出来る静けさを、何とか取戻したいからである。憩いのある生活こそ未来への力の源泉だからである。そう考えるときわたくしの心は一抹の希望のような、光のようなものを行手に感ずる。

それは外形がどんなにつまらぬものであっても、その奥には必ず良心がひそんでいるに違いないという豫感である。その良心とは、江戸以来の庶民の住む下町だけがひそかに抱き続けて来た、伝統を尊ぶ心にほかならない。わたくしはそれを求めてゆこうと思う。(昭和三十三年晩夏)

築地の歴史

わたくしは勝鬨橋かつごうばしから小田原町（註・現在の築地六丁目の一部）に歩み入る。

小田原町もいわゆる築地の一角ではあるが、もとは南小田原町のほか、海岸べりを南本郷町、上柳原町、南飯田町と称して、漁民の街であった。

わたくしの歩く道は昔は海岸で今は隅田川の河岸沿いとなっている広い通りで、築地が外人居留地となった明治時代の波止場のあったあたりには、漁業会社や汽船会社の事務所や大倉庫がずらりと並んでいる。震災、そして戦災と変りに変わったところだが、ここは昔の上柳原町、南飯田町の一角で、今は小田原町二丁目である。まっすぐに歩いて右に折れると、すぐに築地川の入口に架った明石橋がある。別の名を寒橋さみさばしともいうが、これを渡ると明石町あかしちょうである。

夏の陽は燦々と降りそそいでいる。歩きながらわたくしの脳裡には築地一帯の歴史が絵巻物でもめくるようにひろがってゆく。――

戦後になって銀座東と名を改められた木挽町のあたりからその東側一帯の、昔は海岸で今は河岸沿いに当る地域を築地浜と呼んだのは、もう遠い昔の夢物語になってしまった。この築地浜が江戸の新天地として地図の上にも現われたのは、有名な明暦の大火の後である。

明暦三年（一六五七）一月十八日に起った大火は江戸の街々をなめ尽しながら翌日まで燃え続け、遂にその焰は江戸城本丸にまで及んだ。そして二十日には稀に見る大雪となったという。その大火の後に木挽町東側の海岸を埋め立てて、京橋川（八丁堀）の船入れ場の南一帯に新地を築き、先ず浜町にあった西本願寺を移した。これが、今の築地本願寺の始まりである。本願寺の周辺はやがて諸大名の邸にも割当てられたが、その他は武家屋敷や町家が次第に広がり、築地浜はようやく街らしくなっていく。

この築地という呼び方は、もともと新地を拓くために土地を築いた所ということで、明暦四年（この年七月二十三日万治と改元）に築地浜が出現した。その同じ年にはまた赤坂や小日向にも築地が出来ていたが、その後この築地浜の築地だけが地名となって残った。

今の京橋川の南方の入船町、湊町、明石町のあたりの海は、築地浜が拓かれて後の宝永年間（一七〇四～一七二一）に埋め立てて鉄砲洲と呼ばれるようになった。鉄砲洲は『府内備考』によると築地の一部とされた大洲でもあったらしく、寛永の頃、井上、稻富の両家が大筒（大砲）を試射したとこ